匂宮

第二 一一一一一一一一下一一一八ㇾ下一一一

出て旅を信濃路やゞく木曽此
二二丶丶一丶一一 口半詞
行ゑ哉よ渡りま世 是ハ木曽乃
山家より出し僧ゆさん桜も
木曽殿ハ江州あはづ原まて
討死なひさるよし承及候程よ
ば清跡を弔ひ申さりやと思ひ
ばつてあまた渡りつへ 此急候

信濃路や木曽のかけ橋あやふ
あふくまぢとふやなのゝ乃
草乃枕乃くりま枕をさたらく
月を隠てゆけた雁なく近江路
やぶ橋の端よ津はにくわく
八橋わたりうふ哉みかり便せ
東舟やだうぬき秀よわごの海

一 うきなふくくるれ身よ便船
申さうあふ是ハ山田矢橋乃
わたし舟やすも明し浅瀬うへ
来浮見る一方のまたとに
便船ハ叶ひたまし三郎こし
東舟とみゆてうへ坊折旅渡よ
船もなし出家なら身よ急ぐへ大

なの乃は別意まふ筏また〳〵
たひ鉄く　ちるもく出家乃
は力なきほどに人ははかりつと
鉄ふ庵し実は鐘ま此渡は船
舟指ゑふる旅行の者
おかすも江乃海の矢橋を
わたる船ならはどう様人の

立たし船ならは　見は又浮世を
渡る業の柴舟の　ほさぬ袖も
みなまた捧乃那きぬ人なれは
誠乃人ゆゑまし下劣な舟を
ゆるし情をへきとも〳〵召候
ろく〳〵　いや小船頭殿
申へき事ありて　やかて候

三下詞
満山ハ皆名所ならざるハ無
き無き名所といはゞ清見寺ろん数
早詞
中は庵 先向ひよ宛さ流て
大山のみえん幾比叡山なり
三下
さんはあまきう比叡山ハ富
ろん叢ヿ山王二十一社志くわ
たる嶽そハ王子だ伊根本乃人

早
宗も残なくうて作 栴あ於
比叡山いゞ王城よわ守しとうに
三下
何さわ可るよなふ 中ゝ乃す
う丸我山ハ王城の鬼門を当里
上カル
悪魔を拂のみならハ一佛乘の
峯と申そ傳へききゝ繁乃法山を
傳教わざまう天台山と号ひる為

詞 叡山乃四明のはじめを尋ぬれば
傳教大師桓武天皇と[illegible]を
ひとつにして延暦年中に
比叡[illegible]給ひ私と称し給ひし
根本中堂の山上まで殘りなく
みえて候 梅々大宮の御在所
りとの[illegible]やうしもあ[illegible]坂本

遠うちまそ社一の さらん蕭よ
あらはれてほうし本源ようけの
みへしはおおかみや此比叡
彼止大遠まて御入るん さ[illegible]
や一切衆生悪を佛性ゆ来とゆ
時は我ゑ[illegible]男とも遠もしう
きゝるん 行のこしく伝衆生

遍ひ乃男なき法僧も玉椿も
遍くそ照あり一仏乗の
峻度金剛乃こすゑをなしへ
麓の山訳の海をたたへ　また
戒定恵乃三学をこころ持　三塔と
丸のいろ人をみ　一念三千
勝を顕しそ三千人の衆徒を置

円融の法も是なる月の横川も
みえしわたる磨樋み麓ハそそく波や
志賀辛崎乃一つ松七社の神輿乃
法楽すこすほをそそく波の
みなれ棹遠き雅に寄り来し
向ひ乃浦波の粟津乃里ハ近く
なかて跳ハと城きえてかの見ゆ

青なりし山櫻花あをを茶まみて
面影も比山乃稜星や青海の
栄ゆる浪志きくもゆかし乃う
あかしきさくなかれよ狩よく
ゆうなたれ粟津よはやく暑み
りわく 露を置きしく草
枕くねし音夜すもなまし乃い

粟津の原乃あはれ秋よれだ為語
猶も昇りむく 白雲かゝ筏
なたく吉ミ卿朋を屋かわ浦波
杯を流し縦ひ旅よ殘衣を流し
雲ふれど粟津の原乃あはれのきに
ひしふ濱くわふれ北浦くたり
備羅乃ちまたまさしりや

ワキ上歌
かしこや邯鄲ほの原ゐの枕よ
ずはちう栄常し見て餘ふき
げりな旅人まてましきのけう
ミテ上歌
なさけの睡栄餘ふも邯鄲の邯鄲方
是こ来皇たきのふも栽なふ路を
とり給ぬ乃御郷さう様さしまして
下しすそしや画思こ彼まて

ゑかたわ
ワキ
廿井の四百画思え
だい此世よなき人あわ椒い着
ゆきあはやう無し
ミテ詞
げやとみえ風
夢のうちうらはゆもりやみなき
枠の邪まて見こえし
ワキ
物のことま
げやくも忘餘人里屋
とりもや
舟まそ見こえしとはやりし濃

うつし渡玉たしもわの　上ゲ詞　舟人
さる漁夫りがう情に見えし翁
なき　口詞　さし舟大きう始よわやさま
あるひとしみえ情ろこのぎさく船
きのふ乃舟人是　シテ　船人入りも
あらす　漁なるも　シテ　あらぬ
上ゲ同　武士のやはせ乃浦の渡し　出

風けを渡うつのやさしわが心
みえしはあらしおなしね是
此舟を法の舟よひ乗のんて
下　我哉まさは春る渡したりとも
新へやきつぬやきぬ生死乃巷
末律る去す風し花かも流る
前後不同幻泡断河きあろ無

悔(?)見樫も一日弓馬の家よ
ひ(?)せし月の主従かにの、南(?)無北
七騎となりて木曽殿ハ近江
路を落ちたまへば兼平勢田より
参りあひて三百餘騎に成ぬ
思(?)後合戦さひくゆかず主従
二騎みうちなりて勢も力もなし

あはつ松原に落行て腹めされ給
らん處(?)へうちひろげく兜をば
心ぼそくも主従二騎ありけるの
松原さして落ちゆくわ兼平
やまず後よわ清(?)數大將乃首
を近(?)のけたわぬきや任(?)しと
とて鎧の縄(?)を返させ木曽殿

法談ある座を無がかくて耳に歎を
遊行しも一所によなさはやの
信在あるとこは説かれて国しかし
如意しくあきの人たゞ無量みやう
ごをロ情お法讃のなざはのふ
本尊敷の人手にりしつま祝りも
事末代乃法船済だく御自名

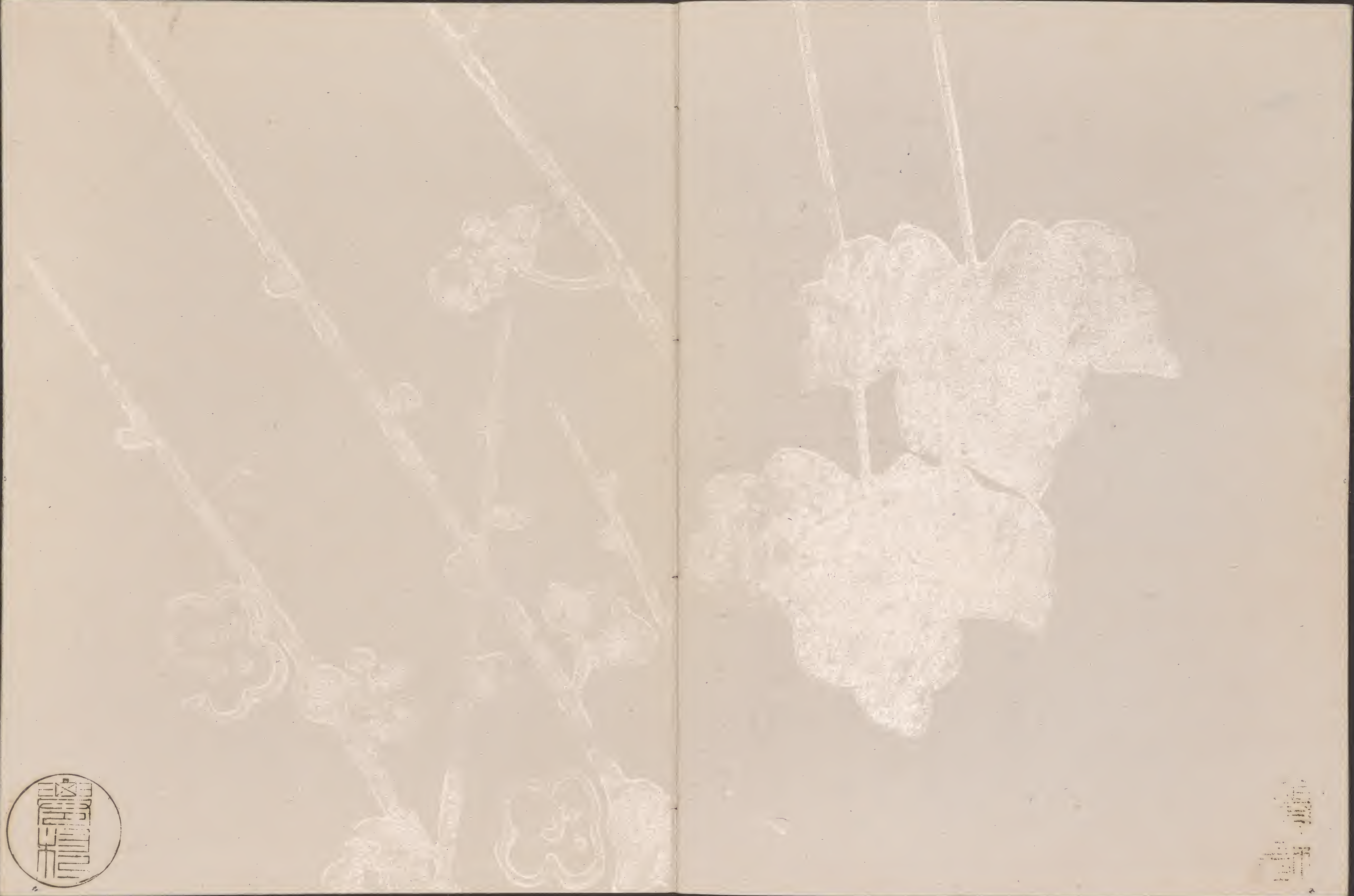
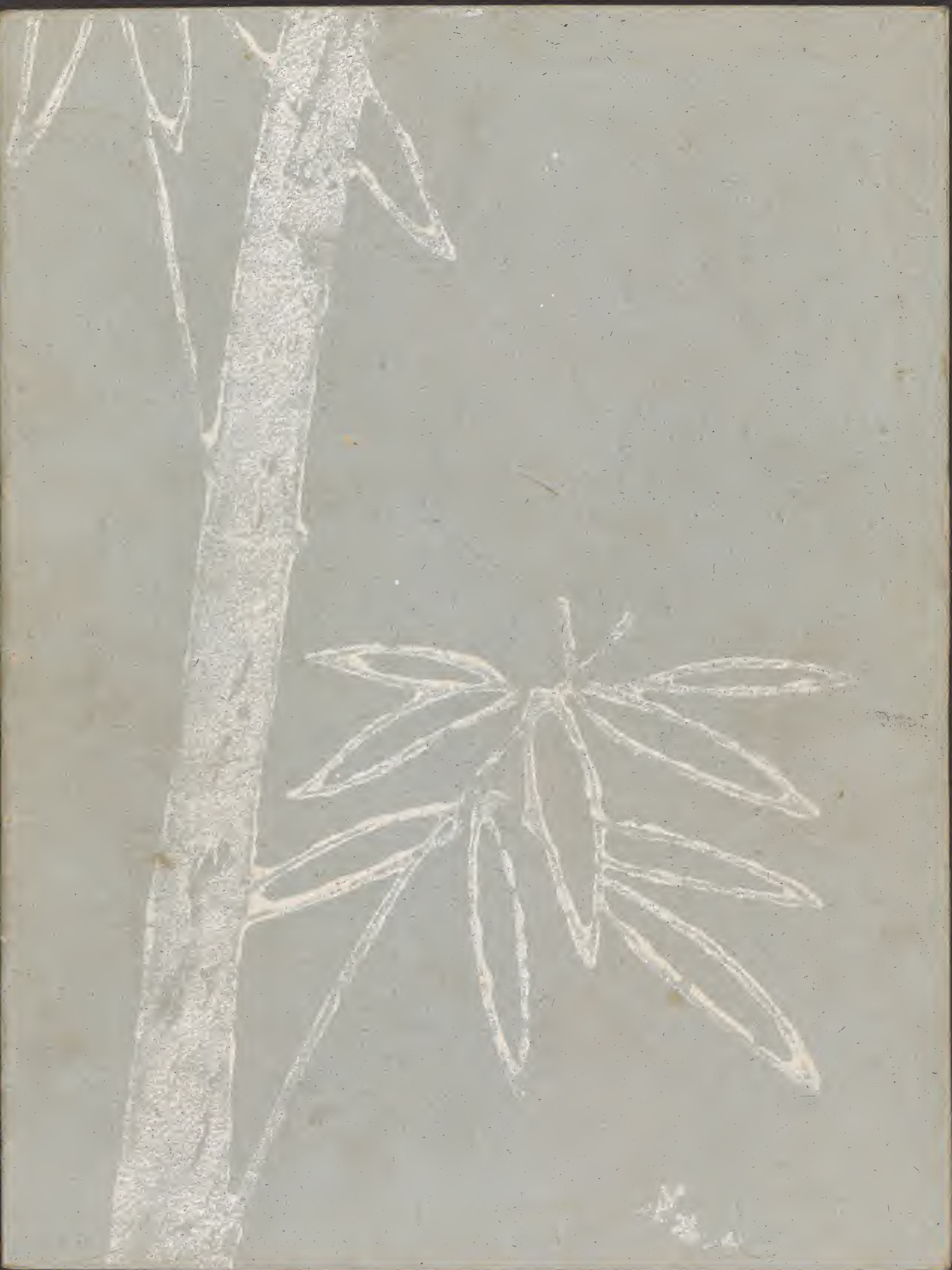
あるあしござ井もやのん条てむ
とのうひうよいそめし扶み
にかくあし落たきのふぎ之事はよ
本尊慶は心ほうくもたく一踏
東使乃りしうのあなるなる杉原
さしてう落斜ふ上跡はむ法お耳
末法のさい法め把なまりてさく之

かゝる時数の山風乃雲間定も
くゝねたとしわかやしや道路の末
しら雪の薄氷深田に馬を乗き
おとしびけどもあがらでうて
どもゆかぬ望月の駒の頭しらも
見えはこそこはなにとなる身の果てむ
身乃果ぞせ兼平もなくあ秀被

はや此後自害をすゝめと太刀に
手をかけ給ひしがさすがにも
兼平が行ゑはいかゞなるらんと
跡をみの兼平給へばいづく
より来るともなき内甲を射る矢
ほそ杉ミ此矢ひと流来てすぐなる
甲にしらしら射られてゆく

まゝし乃跡ただまゝもあへす
馬上よりわざを地にうち玉とかは
とくる幾多の我よりわもぞ君乃
御路をまもりとふひうたひ竹く
実はほしまち軍勢のうひとの
河窮ハ河とりなりせ頭乃御
西風ハこのまうともぞまうて戦ふ

平塚よも清窮の佛体を心よ
このまうはそうわ梅で後子
思ひしも顔の弱さにまかせて
ずおのひとのうたまた思はぬ心
より御舞をゆ─よわ心幾
何成り敵すへ美し思ひとて
西風乃成て扶る窮改乃悲言と

抑も世りるし大音あ實木宮殿の
清内まも井乃四方通ほとぶ禁
のきて犬統は三津以ませ奈本
よわべ一藤當手の秘術を尽し
大統を稟け乃流れをつくめて
破打浪のまくわきわざもて十
文字まゝまる彼ほうけと我津う

天後自君乃在本よりもだ大刀拭
ゐきえ入はりきてりきろ方にかゝりて
清那然のれう統まとわざ通ほり
さいろ、うよしき月をかとろ事ん
あつまゝきゝまなわく